

炭部 屋裏上野勢 長屋門前大石如

まきこまきくちかしくてうれぬい 志るも子れま炭部まき  
五色のまき

いりまきく黄子るあまきと炭部屋であけまきこまき白あまの袖  
麻あま織ても又子人武士のあひの中まきまきとまきして

かろけハまきれま多子まきまきまきまきまきまきまきまき  
少おれ者まき小桶まきおんまきまきまきまきまきまきまきまき

少おれ八景

本不夫大乱

四十餘人大別者 破門我塙我先罵  
家中男女不及言 遠を寝耳浮水夜

家言き我より人のあまき付あまきこまき不死あまひびく

少おれ夜者

年活意炭部屋中 昔少おれ今笑止也  
間教喜兵達一滄 十次不透揚首夜

おしあすまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

左兵落涙

逃散者共漸々集 父見死骸尋首急  
今更落涙不ゆる心 被付は親痛疵泣

まのこまきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

孫村番人

虚斬不起番を仰 孫村今おまき合別

於見鏡八百屋亭

非常出立悪折節

敵のつろてうちんの紋子不足てうてきこりてく二つこれ子

高家暮雪

道理我今年暖冬

時前消易用心凶

名本高家逃足疾

不懲一度又掛鋒

雪ふる雪ふ少くのあけそて子よハ此色もあけよあけ

延引

急切延引可依奉

世間評判更無窮

不向討手誰

所村辻番因腹中

あけ出して家のうき名をこまきるおそれぬきまふる浪人

勤歎冬月

他日用心如藏六

運今深夜後遂絶

敬言士卒老為勤歎

結句欠

よもそくろる者すきまどくさよ守て月とらりてうつけのそ

泉岳晩鐘

奉望一逐名所忍

静語主墳以首供

四十餘人必死軍

明日誰聴入相鐘

あいの鐘きこるる切どやーおあつけさへ及ん

落首の音

あそぎとをあるとほしう定紋のうを著ぐるこみ不柄のう

少ねであ子とてうもきまれてハ位と人やううん

牙より出るさびおとさぬう上舞砥名字の如く切れと

言家とてきりきり志まも今ふもやうくるうきぬれしうはるうつけ  
人あるといふ人あれとあげ老もあつたやいたん切れさひやうふ

註曲 本所逃盛

親を本所の叔討やあれ一歩同十次郎先負内務分がまふまを  
聖系トヤタムハ先負とまきいのおやぢとらんてそとてけへ大ねう  
と名れづくぬれまなく又をわやうとぬれ白むとまふ一歩り名  
のれくとせぬれども終る名のうず声ハ坂東とまふてけと中せ内務分  
あつたれ上舞あてやあまうんまあふまき年の病あまべ一足とぬて  
かん子れあおあまの侍さうあうとあまうんと叫一歩あまう  
と二目とくううと折目ひあうられやこれハ上舞分あてけひらとぞ  
や義美つぬしヤさき一ハ色一や夜討の入りううハ若殿系とちあ

ひてきりれんともう子一うべ一おせん隠れんと仰せかひりようぬそ  
あつ及びひひが珠子とれおひけぞやあれども血ううて首のこ  
けうとふ志れずけまうあうくあうとせてお魂へとももあず首  
と持座あまを三てあうう子る手あ舞子のぞこて小桶のげううひ  
たひの病も少ねお氣もをまてハ此白敷の敷と手で氷清てま  
あ老体の首を洗ひてえれが血のあれ落てまこの上舞の分  
アまうう実子名と情お二一あけハ誰もくこそあまべとこ子一  
同子目とひらう

同 録末

つぐそ此附の恥の氣ハ多まき子なるハあてありよあ子るのちあ  
門ふちあうちうふ手痕あをえて甲十七人子と孫とふあう

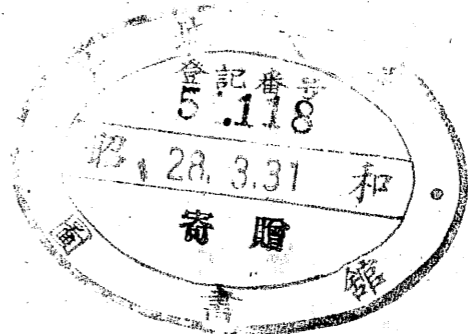
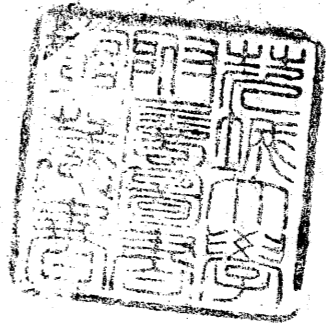


赤城浩穂集

夏

210.5  
2

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10



赤穂義士隨筆卷之二

同録

大石良雄の書 大石屋敷の巻

二巴紋の巻

同 遠愛の巻

同 武庸の書 兼康祐元が看扱

同 横川宗利の書

同 大石子孫の煙管筒

同 富森正因が發せ置巾

同 武林只七の印

同 寺坂信初の遺物

菅氏所蔵

大石良雄肖像

岡自畫像

良雄書簡

山科大石屋裏

良雄自記活採の披書

日義文ややすの唱書

大石至親の書

吉田兼亮自詠色紙短冊

長島常樹の短刀

日鏡の穂

蔵貝正久の斥袖

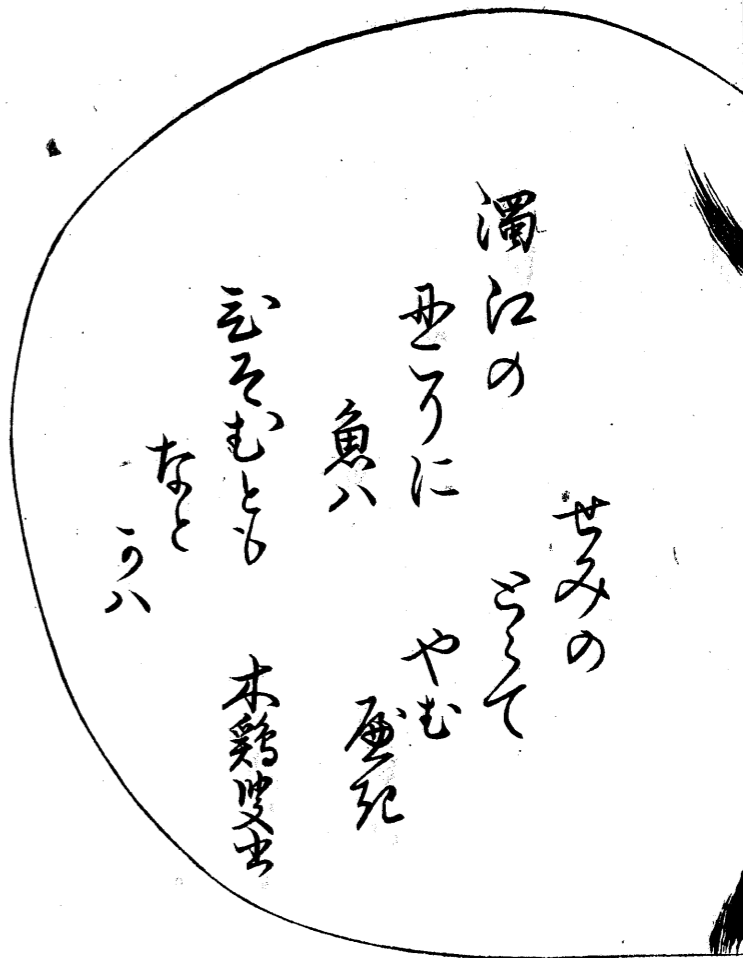
赤穂義士随筆卷之二

良雄自畫像



古本

五圖一尺三寸案



濁江の さまの

舟りに やむ

魚ハ 産死

むそむとも 本鶏也

ちと

うハ

巴の團一尺五寸



41121

おんやき 大石屋まの尾

世人飲慕石大夫之義也則從之獲其屋尾  
珍馬蓋以其家標記所謂二巴紋者也亦

アイオヨフラスクノタケヒルカサリウイケイ エテモラ名テラスコレガサシラ  
愛及屋鳥之比哉柳夷卿獲之立為之讀  
讚曰

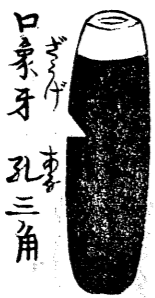
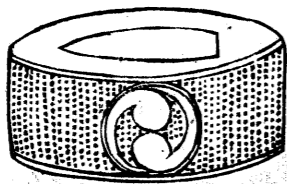
身同玉碎 名典瓦全 遠風凜々 霜凜氷堅

赤穂 赤松助題

同 刀の縁 呼子笛

良雄が叔討し持る笛をり

大さ團の如



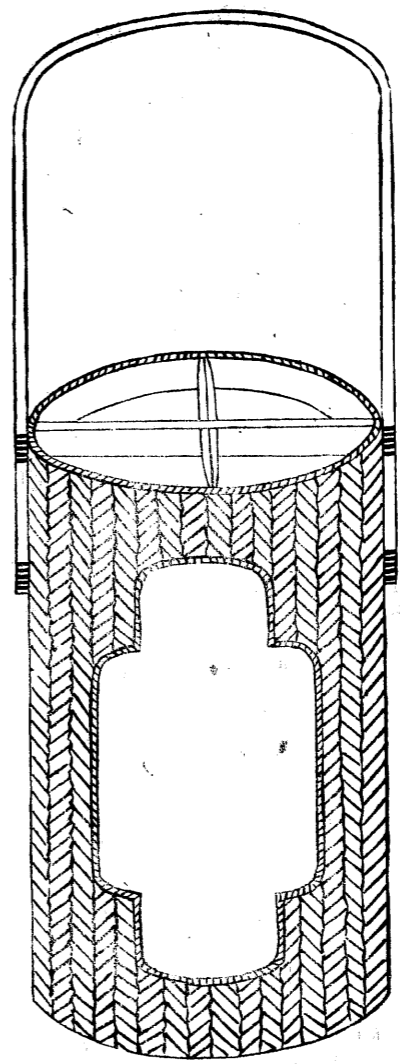
口栗牙 孔三角

この呼子笛ハ後仇討りのとあり新工夫とて造るものなる  
す良雄が携へたる由ふる古製のものあり予もふる古甲より



ひかりーとさるものと暮造りて蔵入りおきて中とさるふーと  
小き丸と入れてあり吹きききその丸とさるてを敷す香のまじり  
うり良雄はうねて武用子備へおるものあるぞ

良雄遠愛の初厨



持入はとさるの  
つるはあて送  
まり

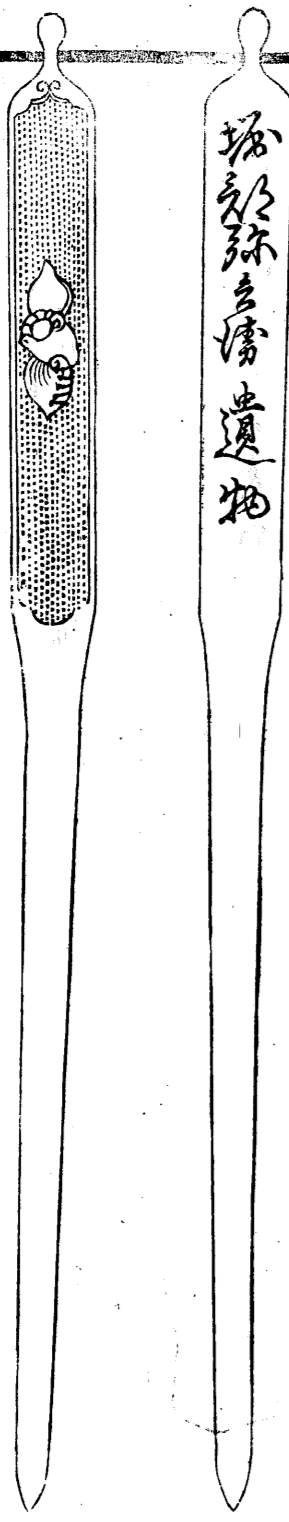
十文字は本と短とさるてさるてさるてさるてさるて  
扱のとさるてさるてさるてさるてさるてさるて  
さるてさるてさるてさるてさるてさるて

たのま程ハ山科の程柵よりさるてさるてさるてさるて  
へさるてさるてさるてさるてさるてさるてさるて  
ゆり遊歴の付まづさるてさるてさるてさるてさるて  
さるてさるてさるてさるてさるてさるてさるて

堀部全丸の筭

二の文字、細井廣海の手あり

堀部全丸の遺物



細井廣海蔵の全丸遺物の筭の図ハ寸銘雜綴に載するあり

